アメリカ言語学界の印象

服部四郎

我々が外国の学問や学界の事情を知ろうとする場合には、主として著書や雑誌論文を読むことによって目的を達しようとする。人によっては個人的な交通をも利用する。併し私は滞米中その機会を最も有効に利用するために、日本に居ては出来ない方法を極力利用するように努めた。即ち学会や講義に出来るだけ出席し、出来るだけ多くの学者と会見面談するようにした。一方ミシガン大学に約一年三ヶ月、ジョンズホプキンズ大学に約半年滞在したことは、私にとって非常に有利であった。また多くの大学や図書館を訪れその施設を視察することができたのもよかった。このようにして、日本に居てはわからなかった多くの点を明かにすることができたと思う。それらのうちの二三の点についてここに簡単に述べることにしよう。

アメリカの大学といっても勿論一概に言うことはできない。ハーヴード大学やシカゴ大学のようにヨーロッパ風をとりいれようとしているものもある。併し幸なことに、私が暫く教鞭をとることのできたミシガン大学は典型的なアメリカ風の而も最も大きな州立大学の一つであった。ここで私の感じたことは、それが私の知っている日本の大学と非常に違っていることである。まず第一に、教師の義務は教えることであり、研究はゴルフや玉突きと同様個人的な趣味の一つと見做される。講義（授業）は教師の持っている最高最新の知識を披瀝することではなくて、学生を教えることである。授業は教科書によることが多く、大学向きの教科書が非常に発達している。学生はそれらの教科書の何頁から何頁までをいつまでに読んで来るようにという風に盛んに宿題を出される。而もそれらの教科書がアメリカ製のものであることが注意をひく。その上約四ヶ月より成る一学期（夏学期は約二ヶ月）の中に二回乃至三回の試験を行う。教室ではディスカッションと称して学生が自由に質問する。先生が話しているまっ最中に手を挙げて質問することが許されている。学生は授業中には非常に熱心に傾聴し、別の本を読んだり、むだ話をしたりする者はほとんどない。試験で良い成績をとることには極めて熱心であり、宿題はまじめに勉強する。しかし教科書や教師の指定する書物以外の読書をすることは、戦前の東大生などと較べて非常に少いように見かけた。ことに学

部在学生は教科書以外の本はほとんど持たない者が多い。外国語の習得も不熱心で大学院の学生でもドイツ語やフランス語の読めない者が多い。ミシガン大学ではスペイン語の授業に出る者が多いようであったが、それは単位がとり易いからだと公言している学生があった。大学を卒業するのは良い職業地位を得るためで、大学院に在学する学生の大部分もそれが最大の目的である。

師弟関係は日本のように上下関係ではなくて、個人としては平等であるけれども、右のような教授法であるから、先生の説が良いとなれば非常に忠実に、生徒達に受けつがれる。むしろ日本の方が、好んで（時には不必要に）異を唱えようとする者があるのではないかと思う。たとえば、ミシガン大学の英語学の主任教授フリーズ（Freiz）博士の英語教授法は非常に勢力があり、教授の弟子達にはその忠実な遵奉者が数多く見出されるとのことであった。私も一九五一年の夏、ミシガン大学の英語講習所の授業に出席してその点を痛感した。また音声学言語学のパイク（Pike）助教授の講義に出て見、その助手の音声学訓練にも出席したが、その人はパイクの音声学以外の何ものも知らない代りに、その訓練法の極めて忠実な実行者であることを知った。

アメリカの言語学界における前イェール大学言語学教授ブルームフィールド（Bloomfield）の著書「言語」（Language）の影響力は、日本にいて著書論文を通じて知るよりは遙かに大きい。一九五一年のミシガン大学の夏学期に、コーネル大学言語学教授モウルトン（W. G. Moulton）博士の言語学概論の授業に出たが、ブルームフィールドの「言語」及び氏の同僚のホール（R. A. Hall）教授の著書を教科書として使い、その何章を何曜日までに読んで来るようにと言って課し、主としてブルームフィールドによりつつ実例を追加して講義を進めるのであった。一九五〇年のミシガン大学の夏学期にはイェール大学言語学教授ブロック（B. Bloch）博士の言語分析法の講義に出たが、全くブルームフィールドの学説をもととして、それを更に発展させたと氏の考える説を述べられるのであった。驚いたことにはブルームフィールドのメカニズム学説が極めて忠実に繰返されたことである。アメリカ中の大学における言語学の講義を調べて見たらブルームフィールドの著書が圧倒的に使用されているのではないかと想像される。如何なる言語学の会合でもブルームフィールドの名が口にされないことはない。而もそれが深い尊敬の音調を以て人々の口から発せられるように感じた。

このようにしてアメリカの言語学界では、ブルームフィールドのメカニズム学説が未だに大きな勢力を持って居り、具体的な学派というものではないとしても、ブロックやトレイガー（G. L. Trager）等を中心に有力な多数派を形成していると思われる。戦時中とかには意味の研究を言語学から除外せよとさえ主張する者があったという。現在では余程譲歩したのだというが、それでもまだ遠い将来において意味を考慮に入れずに言語

学的研究の出来る時代が来ることを夢見ている者がある。一方、この一派とは多少対立して意味の研究の必要を認める前述のフリーズ教授にしても、ブルームフィールドの影響を大いに受けている。要するにアメリカ言語学界においてはブルームフィールドの「言語」が聖書のような役割を演じているとさえ言っても過言ではないのではないかと思われる。ブルームフィールドのこの著書が、言語学研究法史上劃期的なものであったことは認める。併しそれは連山の中の一峯にすぎないとも言えよう。またその内容に対しては色々な疑点もある。ブルームフィールドを克明に研究することは大切である。しかしそれに止まることそれ以外の学説を研究しないことは危険である。

アメリカは幸福な国である。日本のような貧乏国には外国の一流の言語学者が流れて来て、而も日本語で講演や講義をしたり著述したりして呉れることがない。所がアメリカではヤコブソンやシュピッツァーやマルティネーのような学者が大学教授として定住し、英語で講義講演をし論著を発表している。これらの人々を真の意味で学問的に抱容することができたら、アメリカ言語学にとってどれほど有利かも知れないと思われるのにこれらの人々は、張出し大関のような位置にあるように感ぜられる。或学者が私に洩らされたことだが、講演などで口をすっぱくして或学説をといても全然受付けないでおいて、数年後自国の学者が同じような説を発表すると学界全体が問題にするという傾向さえあるという。ヤコブソン教授の弟子である若いアメリカの言語学者がヨーロッパ的術語を用いたら右述のホール教授から「非アメリカ的」だとの非難を受けたと、ヤコブソン教授が書いて居られるが、このような国粋的な傾向はアメリカ言語学にとって誠に惜しむべきことと思う。虚心坦懐、外国人の説を傾聴したら、国家の富強に支持され、多数の人材を擁するアメリカ言語学は更に更に速かな正しい発達をとげるであろうと思われる。

なお、アメリカの学生を教えて感心したことは、知らないことも辱じて口を閉じているということなく、自由に質問すること、人がわかって了ってもそんなことには頓著なく、自分がわかるまで質問し考えることである。また自分の懐く疑問を人人の前に公開することを恥とせず、討論に附するのを憚らないことだ。日本の学生には、周囲の様子を見て、自分がまだわからないのに、わかったような顔をする者があるのではなかろうか。一対一で対して居る時は遠慮なく質問しておきながら、人人の前ではあまり質問しないというような学生もありはしないか。学問は見栄のためにするのではない。真理の探求が目的である。論著にしても、虚勢を張るような傾向は、日本の方が多少余計にあるのではないか。よく知らないことを熟知しているかのように書く傾向、人から聞いたことを自分の考えのように書く傾向は日本人の方が余計あるのではないか。日米人のこのような差異は、小さいことのように見えるかも知れないが、民族全体としては大きな力の相違になるのではないかと思う。ア

メリカ言語学が、前述のような傾向があるにも拘らず、ひどい横道にそれることもなく概して着々と発達して行くのは、各個人が能力に応じて納得が行くまで合理的に考え、知ったかぶりをすることが少ないという社会習慣が、一つの大きい原動力となっていると思う。その外にも、勿論欧州の科学の成果そのものを受納れるのに、日本よりも遙かに有利な地位にある点も指摘しなければならない。

アメリカでも権威者を盲目的に崇拝する傾向は勿論ある。蓋し之は人類社会にはたらく一般法則的群衆心理であろう。しかし日本のに比較すると、その学者の地位よりも、その学識能力に余計注意が集中するように思う。人に追随するのならば学識能力に対してなす方が学問の進歩にとっては好ましいと思う。一方、これは元からあったことではあるが、戦後殊に、各人が自己の学問に盲目的な自信を持つ傾向が、日本でも見掛けられると思う。人間は自信の動物であるとも言えようから、之は無理からぬことだが、その自信には客観的な合理的な裏附けが必要である。他人の学説を十分理解するように努力し、自己の説と公平に比較した上での自信でなくてはならない。アメリカ人も中々自信が強いが、少なくとも学問に関する限りでは、日本人よりも多少客観的であり合理的であるように私は思う。

最後に研究発表会について一言したい。これには luncheon conference（晝食討論会）や forum lecture（討論講演会）のように一時間乃至数時間に亘る講演の後に討論の行われるものもあるが、十分乃至二十分の講演の後に五分ほどの討論の行われる（全国的な）大会もある。アメリカ言語学会では後者を年に二回開くが、或アメリカの友人が諷刺的に言っていたようにこの種の大会は、一、どんな顔をして発音するかを皆に見て貰うこと、二、大学等における地位の取引が行われ、就職の機会を作る、三、友人と会ったり知人を作ったりする、ことが主たる目的である傾向がある。面白い発表もあることはあるが、時間が短いから大きな重要な問題は論ぜられない。しかし之で大会は結構大切な社会的学問的役割を演じているのだ。種々の国際学術会議にしてもこういう傾向があるであろう。研究発表をまじめに重んずる日本人の目からは変に見えるかも知れないが、何でも外国の事物を日本的枠のみから眺めたのでは、これを正しく理解することが出来難いであろう。

——東京大学教授・文学博士——